

サンドラ・ヘフェリン氏講演会

「他者を助けたい気持ちはどこから？」

～難民を受け入れるドイツのボランティア精神から考える～」より

川辺祐香

前日までの過ごしやすい天候と打って変わり、最後の桜も散らす雨が降りしきる4月3週目の土曜日にこの度は日本在住25年、ドイツ、ミュンヘン出身エッセイストのサンドラ・ヘフェリンさんのご講演を拝聴し、個人的にも友人であることから皆様にご紹介をさせていただき運びとなりました。

ご自身が日独ハーフでいらっしゃることから「多文化共生」をテーマに執筆活動をしておられ、日本語とドイツ語の両方が母国語である彼女の両国における体験や取材に基づく講演は高校生からシニアまでの幅広い会員、非会員の方々にとって興味深い内容のものであったように感じられました。

ロシアによるウクライナ進攻に伴い、ドイツには多くのウクライナ人が避難していることは周知のことではありますが、2022年8月時点では90万人以上のウクライナ人がドイツ在住であり、その多くがドイツ到着後ドイツ人の一般家庭に身を寄せていることから見知らぬ人を、ましてや外国人を家に泊めることへのハードルの低さを一般的日本人との比較から話は始まりました。当横浜日独協会の活動の一端を担うドイツ人交換留学生やインターンシップのために来日する学生のホームステイ先を探すことも容易にはいかないことを考えてみれば、確かに戦火を逃れ避難してきた言葉も文化も違う家族を一般家庭に受け入れることを90万人以上という数にも関わらず可能にしているドイツの文化的土壌は日本のそれとはかなり違い、その懐の深さの背景は興味深いところがあります。

日本ではコロナ禍で「三密を避ける!」「ソーシャルディスタンス!」を掲げてなるべく人と人が関わらないことが推奨されました。同様にドイツをはじめ世界中でソーシャルディスタンスの1.5m～2mはクジラの全長や力士が手を広げた挿絵などで紹介され、ことにドイツなどではスーパーでは牛乳1本の買い物でも1.5mほどある買い物カートを必ず押してレジで並ぶときに距離が保たれるように工夫までしていた中で、隣国からの列車に乗って避難してくる人々をひしめき合いながら中央駅に向かえ出で、同じ屋根の下で寝泊まりすることが自然にできるボランティア精神、それはどこから来るのでしょうか。

雑誌 Spiegel (2022年16号)によるとドイツ人の62%がロシア進攻により第三次世界大戦の不安を感じ、55%がロシアの核使用を不安視している中で無力感が生まれ、そのような中でも自分が出来る範囲でボランティアをしようという気持ちが湧き出てき

たとのこと。また、「ウクライナ進攻」と「コロナ禍」の二つの大きな不安を前にして自分が不安に思う時、それを解消するために良いこと、ボランティア活動をして不安を解消しようという気持ちになるのではないかということです。

ドイツにおける所謂「スーパーボランティア」と呼ばれる人やサンドラさんの知人などを例に共通して考えられることはドイツ人の「ファミリーヒストリー」とも関係しているのではないかとのこと。

シリア・セネガル難民の生活支援を徹底的にしていることで知られているあるスーパーボランティアは 1950 年代の戦後に自らがベルギーに幼い頃に預けられ、大学までの間に体験した中で「言語」「習慣」「仕事」の障壁を痛感し、一時的なサポートではなく根本的で持続的な支援をしているそうです。

また、ある元ピアノ講師の年金生活者は教え子の死を通してその遺族のケアに関わったことで、緩和ケアでそばに寄り添うだけでも自分が人の役に立つのかもしれないということを知り、自身が高齢者でありながらも活動をしているそうです。そこで、日本と大きく違うことはその動機を尋ねると「自分は親から遺産相続も受け、健康でもあり余裕があるので社会にもお返しをしたい。また、ボランティア活動を通して自分が生きていることを実感する。」と返答されることです。日本ではそのように答えると自己満足であるとか、謙虚さ不足と叩かれがちですが、そこはドイツではとらえ方が違い、自分の生活状況からくる動機付けでも構わないと捉えられることです。このことには私も日独の大きな考え方の違いとそのことが導き出す結果の違いを感じざるを得ませんでした。

他にも”Be an Angel“という NGO を設立して難民支援をしているファッション誌”Vogue“の元ライフスタイルジャーナリストだった所謂セレブの世界で贅沢三昧をしていた有名人 Andreas Toelke 氏にいついて。彼は世界を良くするために貢献したいと気づき、のべ 400 人の難民に自宅開放をしました。またコロナ禍では、彼の支援で元難民がベルリンでオープンしたアラブ料理店がホームレスに合計 80,000 食を提供しました。そのような活動が評価され、Toelke 氏は 2021 年 12 月にドイツ連邦功労十字勲章 (Bundesverdienstkreuz) を受章したのだそうです。彼は幼少期に母親から「祖母はアウシュビッツで亡くなった」と聞かされ、子供ながらに「どこかへ避難する手立てがあれば、祖母は殺されずに済んだかもしれない」と強く感じ、その思いが今の彼の活動の原動力になっているそうなのです。

様々な事例を挙げてくださり、印象的だったことは難民の夢と現実の狭間で、ウクライナに帰りたいたいと思っている難民と現実的なドイツの政治家の捉え方の相違です。SPD の Maja Lasic 氏の発言「難民としてドイツにやってきて、ドイツの学校に通って

いる子供たちについて、本人や周囲の『すぐに国に帰るだろう』という希望的観測が現実になったことは今まで一度もありません。」が物語っているのではないのでしょうか。このことは、これまでの歴史の中で複数の隣国に接しているドイツが直面してきた現実の経験に基づいて学んだことなのでしょう。その現実を直視したときに、一時的な支援ではなく、将来に繋がる共生社会として発展していく手段を政治家はとらざるを得ず、またドイツ国民もお客様としてではなくキリスト教的隣人愛を根底に、対岸の火事ではなく難民を受け入れることのハードルを低く、望みは高く持ち続けることは自然の成り行きでもあったのかもしれないと感じました。

講演会後の質疑応答にも快くお答えいただきました。

Q: 「ハーフ」と呼ばれることについて、また他の表現はあるか？

A: 「ダブル」「国際児」様々試みたが結局「ハーフ」が定着している。

Q: ドイツには振り込め詐欺（オレオレ詐欺）はあるのか？

A: ある。まさに Enkeltrick（孫詐欺）「おばあちゃん、オレだよオレ！」

Q: どのような日独両方を母国語と出来るようになったか

A: 両親がそれぞれの母国語で話しかけたので自然とバイリンガルになったと思う。

Q: ご自身のメンタリティーは日独のどちらだと思われるか。

A: 両方。その時により日本に長くいるとより日本的になる傾向もあるかもしれない。

また、ある会員の日独両国での人助けの体験談を通して知らない人に対して日独の親切さや行動パターンに関する違いなども共有しながら楽しく有意義なイベントとなりました。

サンドラさんのお話にもありましたが、「心の余裕」なしにはボランティアもできず、その心の余裕も時間的余裕がなければ難しいことでしょう。ポストコロナに向かう現在、ワークライフバランスを大切にして「心のディスタンス」は離れ過ぎずにできる範囲での自らが与えられた力を生かして共生社会の一員として日々を過ごしたいものだと感じました。

(2023年4月16日 記)